

後藤一磨氏 講演録 —平成24年1月20日 宮前市民館—

こんにちは。ご紹介いただきました南三陸町の後藤一磨と申します。

まず初めに皆さんに3月11日に私たち被災して、これまでほんとに多くの人たちにご支援をいただき、そしてようやくもうすぐ1年を迎えるところで、仮設に入ったり、それぞれの住居にいながら生活を取り戻しつつございます。そうした皆さまのご支援に対し御礼申し上げます。ほんとうにありがとうございました。

今司会の方からご紹介がありましたが、宮城県南三陸町が皆さんには地理的にどういうところか分からない方もいらっしゃると思います。わかりやすく言うと気仙沼が北、そして南に石巻市、その間に挟まれた小さな港町、それが南三陸町でございます。平成の合併以前は旧志津川町それから旧歌津町、それが平成の合併で合併しまして、人口18,000弱の小さい町です。町の西から北側には北上山地が連なっておりまして、北上川がある仙台平野と沿岸部を分けている。北上山地から太平洋沿岸に急峻な山が海に駆け下りるような地形で、そこはリアス式海岸、のこぎり型のジグザグした入り江が多く、風光明媚でとても暮らしやすいところでもございました。観光客も徐々に増え始めて、産業は漁業を中心とする一次産業が主で、それをもとに加工業などさまざまなものがあって、それがそれだけではなかなか難しいってことで、観光をその中に入れて皆さまをお呼びしてということが始まって、ようやく緒につき始めた矢先の出来事でした。

3月11日、何が起きたかは、皆さんは新聞・テレビ・ラジオ、あるいはさまざまな雑誌でご存知のことだろうと思います。3月11日午後2時46分、ものすごい揺れでした。大きな横揺れで、壁かなんかにつかまっていなくて立ってられないすごい揺れ。揺れのすごさもさることながら、時間がすごく長かったです。5分か6分ほど揺れました。ぐらぐらぐらぐらーって感じで。「何起きた！」私はそのとき、家から5分ほどのところにある私の母校である南三陸町立戸倉中学校にいました。翌日の3月12日が卒業式、その卒業式の前の日の午後と同窓会があるものですから、その同窓会に卒業生をお招きするというか、入会させる式をやりました。式が終わって校長先生の部屋でお茶を飲んで、「そろそろ時間だから帰ります。あした卒業式楽しみですね」というような話をしながら玄関で靴を履いているとき地震が起きた。学校そのものは約20mの海辺の高台、そして建物はまだ10年しない新築の鉄筋コンクリートの建物でしたので、何も心配はないんですが、その揺れのすごさは玄関のサッシ戸がそのまま外れていくんじゃないかという大きいものでした。

三陸沿岸には10年ほど前から、ユーラシアプレートという岩盤と、太平洋の底を形作る太平洋プレートという岩盤がぶつかり合っていて、そのひずみが解消されない場所がある。その場所は30年以内に90%の確立で動くであろう。それが動くときマグニチュード8クラス、規模は100キロの地域が最

初に動いて、それに刺激されるかたちでもう100キロ動く。あわせて200キロの部分動く。そうすると津波が発生して5～6mの津波が、場所によっては10mくらいになるかもしれない津波が発生するというのが、ずっと言われ続けてきました。それで沿岸の市町村はそれに備えるべく堤防をきちんと整備したり、そして河口に水門を整備したり、この宮前区でもやられていると思うのですが、自主防災組織を立ち上げさせて、きちんと対処させる。その準備が始まったところでもございました。それがございますから、私は、地震があったとたんに「ああ、宮城沖地震、いよいよ発生したな」「この揺れだったら必ず津波がくる」そう直感しましたので、校長先生と教頭先生に「生徒たちよろしくお願ひしますね」と言って、気になる自宅にとって返した。まさか20mの高台まで津波が押し寄せるっていうふうには私の頭の中にもございませんでしたので、そういうかたちで、すぐそこを去ったんですが、あとで知ったことなんです、その20mの高台まで津波が押し寄せて、その中学校の1階が水没しました。生徒、職員それから近所の避難してきた住民たちが2階に上がって、難は逃れたんですが、ものすごく荒れ狂う20mの高さの津波に周りを囲われた時のことを、皆さん想像できますでしょうか。中学校の2階にみんなでじっとしながらその津波を見て、ものすごい恐怖感が湧いたそうです。それで第一波の津波が引いたあとにも、ここではもっと高い津波がきたら俺たちだめになるからということで、向かいにある高台へ避難した。大部分の方は避難できたんですが、足の遅い中学生がいて、二波めの津波にさらわれました。そして、その生徒を助けるべくふたりの教諭が助けにいつて流され、1名はかろうじて命が助かったんですが、先生1名とその遅れた生徒が犠牲となっています。ほんとに悔しい思いがします。あとから中学校に行ってみますと、中学校の校庭も山へ登る部分の赤土の斜面に、みな必死で登ったんであろうと思う足の跡と、爪で引っ掻いたような跡が無数についていました。

さて、私は海の変化を見ながらそこから5分ほどの自宅へ戻りました。自宅へ戻ると、妻と息子が棚から落ちたものの整理とか、そういうことを一所懸命やってました。「お前たち、必ず津波がやってくる。そんなことをしている暇はないから。とにかく上の高台に逃げなきゃだめだ。チリ地震津波と違って、すぐそこで起きた地震で起きる津波だから、早ければ15分、長くとも30分から40分でここに津波が必ず来るから、とにかく逃げろ！」私はまさか背広姿で避難できないので、あとのことも考えながら、普段着に着替えて、着てた背広は2階にポーンと放り投げて避難しました。背広の中に携帯とかいろんなものがあって、あとで「あれしまったな」と思ったんですが、まさか自分の家まで流されるっていう想定そのものが、私の中にはなかったからそういう行動になってしまったんです。女房は跡取りでお墓守の役目があるんだからって、仏壇にある位牌とかさまざまものを抱えようとしたので、「そんなもの、あともう時間がないから、持ってはだめだ。そのまま逃げろ！」それで女房と息子が乗用車で、すぐ脇が高台だったものですから、高台の自分の畑の方に逃げました。私は飼犬を軽トラに乗っけて、そのあとを追ったんです。高台から海を見ま

した。普段はきれいな海が続いてて島が2つ浮かんでまして、そういう光景が見えるんですが、ふり返って海を見ると、その島に歩いて渡れるほど海は水がなくなりました。海水が引いてなくなって、海の中に山ができて谷ができて、その深く谷になった部分を海水が川になって流れていく光景が見えたんです。

実は、その光景は50年前、昭和35年5月24日の早朝、中学1年のとき私は見ていました。「ああっ、また海の底が見えた！ チリの時は、家に津波が来て畳の上30cmぐらいになったけど、すぐそこで起きた津波はどんなかたちで来るんだろう」そんな思いで見えていました。高い場所に家のある人たちは、避難しようか、それとも避難しないで大丈夫だろうか、家から道路に出て、うろうろ、うろうろしてましたんで、「とにかく逃げろ！」ってことで、私がいた高台までみんな避難してきました。その引いていた海、水のなくなった海の水平線上にそれから10分から15分して白い線がスーッと引かれて、「ああっ、来たぞ、津波だ！」10分ほどで押し寄せてきました。

南三陸町は昭和35年に被災を受けて、41名の死者を出し、町は半分崩壊するような状況の被害を受けました。それで、そのあとに35年の津波の水位プラス50cmの高さで、湾を囲うように堤防をつくったんです。それをここんとこずっと整備して、まあこの堤防があることで少しは津波を防御してくれるんだろう、そんなふうに思いながらみんな暮らしている。津波が来てみますと、その堤防が何の役にも立たなかった。昭和35年のときは、その堤防なしで、1.5mぐらいの海側が石垣、陸側が土の堤防で、そうした背の低い堤防があって、私がいた波伝谷っていう集落の場合はその堤防がある程度守ってくれたのかなと、最初は思ったんですが、津波が来て轟々と渦巻きながら海苔養殖の竹をからげ取って、バリバリバリという音をさせながら内湾の方に流れて、そして、ああ大丈夫、上がらないなと思っていた瞬間に流れていった水がいったん止まって逆流を始めた。あ、引くのかなと思っていたら、その瞬間に海がふくれたようになって、その1.5mを超えて海水が流れ込んできた。そういう津波だったんです。

今回はまったく違いました。その堤防がある事を感じさせない、走ってきた津波がそのまま陸にスーッと入ってくる。そういう状況でした。速さは、多分40~50km。堤防を超えて陸地に入ると堤防沿いにあった家をまずなぎ倒していきます。木造の家は、柱がへし折られます、バキバキ。それで屋根とか2階が下に落ちて、その頃には10mぐらいの高さになってて、その波は渦巻くように家を呑み込む、解体する、もうザクザクに砕いていくって状況でした。それがつぎつぎに進んでいって、まさか15mとかそのへんにある家は助かるだろうなと思っていたら、それがふくれあがるみたいな急なすごさで流れていって、つぎつぎ流されていった。

私の家は、明治29年の津波に罹災して海岸部からその当時罹災しなかった地域に建てた、10間半の5間半、それに部屋がついてる大きな茅葺き屋根の家だった。それと最近親父が勉強部屋というかたちで、その脇に新築した家があったんですが、私、山好きなものですからいろんな植木を植え

て、まあ屋敷林つくってたんです。その屋敷林の影響もあったんだらうと思うんですが、最初に来た波に、その新築した家は、海岸線にあった家と同じように呑み込まれていきました。でも茅葺き屋根の私の母屋は、他の家みたいにほかれなかった。それでも軒を超えたとたんにだめでした。もう持ちこたえられないよって感じで、ぐらっと傾いて、ふっと浮いたみたいになって、そのままの姿で波に流されて、西の方に流されていきました。そして、返り波で茅葺き屋根はそのまま全然崩れることなく椿島っていう島の沖へ姿を消していったんです。私の父は30年ほど、漁業協同組合の組合長やってまして、その組合の事務所の方まで家が行って、それから返り波で沖の島の方へ消えていったものですから、女房とふたりで「ああ、家が俺たちにさよならしてるな、親父が勤めていて事務所までさよなら言いに行っ、太平洋に消えてしまった」そんなところでした。

早く逃げたんで、実は津波には私たち追いかけていません。命は確実に助かるかたちになったんで、恐怖感はなかったです。ただ、現実起きてるその状況は、とても考えられないもので、ほんとにこれ今起きてる事なんだろう、映画か悪い夢でも見て…、そんな感じでした。家が消えていくのはとても寂しいものでした。次から次に家が呑まれていく。もう集落に80戸ほどあった家は、ほとんど流されてしまった状況です。一波が引いていったあと避難してこない80からのおばあさんがいたんで、区長さんが「おれ区長だから行ってみなきゃない」と下に降りて行くんですが、二波がまた来ますんで、あぶないからと区長を止めて、いちばん高いところへ避難したんです。逃げた車のところまで津波が来て、津波に2台の乗用車が流されてしまいました。息子は買って3ヵ月めの車、そしてパソコンも新しく買い替えて、自分のおもだった財産をその車に積んでましたので、「ハアッ」てため息ついて「あー、みんな全財産が流れていく」

でも、そこにいてもどうしようもございません。私たちが逃げたところは海の上に浮かんだ島みたいな場所で、そのいちばん高いところにみんな避難しました。最初からいちばん高いところに車で避難した人も10人くらいいました。それで、顔を会わせて、小さな集落ですからみんな顔が分かります。誰が何してる、ここはどうなってるかなんてことは全部分かってる。個人情報なんて隠しても隠しきれない集落なものですから、避難して来てる人の顔を見ながら、来ない人を数える。あの人はどうした、この人はどうした、いろいろ聞くと「いやあ、あそこの家の親父と息子は、なんか大事なものを2階に運ぼうとして整理して、その家ごとどうも流されたみたい」「あそこの夫婦は、軽トラで逃げようとしてたけども、親父が海を気にして、堤防に上ったり降りたりしてた。そのあとはわかんない」「あっちの夫婦は、女房は先に逃がしたようだが、親父がまた家に戻って、どうも逃げたのか流されたのかよくわかんない」集まった人たちは70人。

3月11日の東北はまだ冬です。今日、この宮前区に電車で来ながら雪の姿を見て、「3月11日あの日も雪が降っていたなあ」そんな状況を思い出しました。時おり西風によって時雨れるように雪が吹きすさぶ寒い日でした。私たちが逃げたその上には、小さな神社があって、10人も入れればいっば

いになる祠がひとつあった。そこには、もうみんなを収容しきれない。それでみんなが相談してここに火を焚いて過ごそう。私は山歩きが得意だったのをみんな部落の人たち知ってますから、「一磨、お前わかっているだろうから、その辺から乾いた木集めてきて、ここに火炊くべ」「わかった。ではひとつ俺のあとついて来い」ってことで、切った木とかそういうのある場所に行って、木を集めてきて1ヵ所ではたぶん70人手をかざすのには無理だろうということで、2ヵ所に火を焚きました。そして、その火のまわりに太めの丸太をまあるく囲んで、その丸太に腰掛けて一夜を過ごしたんです。小さい子供とお年寄り、そして弱そうな女性は逃げてきた10台の車に分散して暖をとったんです。

北の空を見ると真っ赤に燃えてました。「ああっ、北の空、気仙沼燃えてるな。火事だっ」「あそこは漁船の油タンクがいっぱいあるところだから、多分石油に火がついた」海を見ますと、航路標識、湾に入ってくる船が安全に入るようにブイに赤い灯りをともした標識をつくってたんですが、その標識がどうも鎖がちぎれたみたいで、波が来ると岸に寄せてく、波が引いていくと沖に流れてく、そして湾の入り口付近には、津波を避けて沖へ出た大型の船が、灯りをともしている姿が望まれました。津波が来るたびに、バリバリバリ、ボキボキボキ、そういう音が激しくする。水の中の建物に残された人に聞いたんですが、津波は翌朝までの間に、陸に上がってさまざまな壊すような大きな津波は9回。もうなんにも着の身着のままです。食料持ってきている人は誰もいません。

「腹減ったな」「のど渇いたな」「誰かれさんの畑に大根あったなあ。あいつ誰か行って抜いてこい」そんなこと言いながら、とってきた大根を丸かじりして飢えと喉の渇きをいやしたりもしたんです。

寒い夜でしたし、津波は一晚中暴れ狂ってましたんで、だあれん寝ることはできない。まんじりともせず一夜は明けたんです。5時頃になると夜が白みだしたんで、4、5人で最初に避難した場所に降りていってみました。集落の姿は一変してました。家の姿は、残っている家の姿はなし。鉄筋コンクリートでできた浄化システムの建物、それからその隣にある鉄骨でできた家、その2軒だけが、窓が割れて、いろんなものが引っかかっている無惨な姿で残ってました。浜にあった堤防は3分の2が倒れてなくなってます。2ヵ所が大きくえぐれて、凹んぼだったところに海水がヒタヒタヒタッと来てました。向かいの方を見ると、そこに逃げた人でしょう、高台から同じように呆然とその光景に立ち尽くす姿がございました。

そこにずっといることはかたないませんで、避難所に行かなければなりません。私たちの集落には、県の施設で自然の家っていう宿泊研修施設が、山に、高いところにございました。「あそこに逃げるほかないなあ」。それでも向いの山まで渡れるかどうか、4、5人でその道を探して歩きました。いちばん狭い場所がかるうじて渡れるかな、でも大きく3mくらい掘れてそこを水が行き来している。それで壊れた家の柱が流れてあるのを渡してその上に畳をのっけて、橋にして「ここ行けば大丈夫

だ」それでお年寄りもいるんで歩けるように、いろいろ材木どけたりいろんなことしながら、元の場所に戻って「さあ、自然の家へ避難するぞ」ってことでその高台をあとにしたんです。1キロ半くらいしかない距離なんですけど、普段であればなんぼゆっくり歩いても、30分もあれば着く場所なんですけど、全部が避難するまでに2時間半かかりました。その間、余震もごさいます。つらかったです。「あ、また津波が来る。とりあえず少し高い所さ登って様子を見よう」そういうことの繰り返しですから、ようやく2時間半たってみんなが自然の家たどり着いた。

自然の家には、そこに研修に来ていた高校生20人ほど、そして隣の人、近所の人で逃げた人がいて、暖かく迎えてくれました。互いに抱き合って「ああっ、大丈夫だったか。生きてたか。よかったよかった」そして「あの人がわかんねえかな。この人どうした」そういうふうな話、したんです。昼になると1個のおにぎりとお水が配られました。そして毛布も手渡されました。そのとき、これほどまいごちそうはあるだろうかとおにぎりを食べました。そしてあったかい毛布にくるまって「あぁ、あったけ」幸いに家族みんな無事でした。たった1個のおにぎり、水、そして毛布。今まで一緒に生きてきた家族がいる。それが、ものすごい幸せだなあって、私は感じたんです。そこで、約20日くらい、その施設で暮らしました。

みんなで助け合いました。私は2日目になって、3日目の朝になって、入ってくる情報はここまで逃げた車のカーラジオから入る情報だけ。聞くと南三陸町、志津川の市街地は壊滅。18,000の人口のうち10,000人が行方不明。JR線も破壊されてなんにもないって言う情報が入りました。「あぁっ、俺たちも行方不明10,000人の中に入ってるな」役場は低い方にあたりすぎるから、もうなくなってるだろう。でも道がどうなってる、みんなどうしてるんか。助けがここに来てくれるのか。そういうもの、情報がなければ動きようがない、と思ったもんですから、何人かと相談してここまで歩くことにしたんです。自然の家の職員に急いで避難者名簿を書き写させました。そして、みんな何が今困っているか、欲しいものは何か、そういうものを書いてもらいました。それをザックに入れて、たまたま私が逃げた軽トラに鉈とノコギリが入ってましたんで、それを腰に下げてザックを背負って3人ほどで町へ向かったんです。

途中はもうがれきだらけで、どこをどう歩いていいかわからない状況でした。とにかく川まで行くと川に橋がとばされてなくなってるんで、川が渡れない。渡れるところまで、ずっと上流まで歩いてそこで渡って、またもとのところに行くってかたちで戸倉って地域で、唯一被災を免れた荒町っていう集落まで行ったんです。そこで車を調達して山沿いに、ものすごい距離迂回して役場の機能が多分そこに集中されているであろうというベイサイド・アリーナまで行ったんです。

ベイサイド・アリーナへ着いて「役場どこで、やってる？」って聞いたら、そっちの事務室が今そこだあって言って、入っていくと5人ほど男子職員がいて、元の町長らとソファに座ってました。

「あぁっ、後藤君来たのか、どっから来た？」「いや、自然の家から歩いてきました」「あぁ良く

生きてたなあ、良かったなあ」「町長さん、家族は?」「うちの女房が行方不明なんだ。で、ここにくれば分かってねえかって、今ここさ來てる」そのうち町長や副町長が來ましたが、皆さんご存知のように、あの防災庁舎の屋上でようやく生き延びた2人なんで、もう憔悴しきってて…。いろんなこと尋ねましたが、「もうどうしようもねえな、町を頼りにするわけにはいかない」ただ、私たちが避難した自然の家にも5人ほどすぐ医者に運ばなければならない病人がいました。それだけはなんとかしなければってことで、どうしようかってやっていると、そこに自衛隊のヘリがグランドに降りるのが見えました。それで、「自衛隊と直接交渉するしかないなあ」って言って、こういうわけだからその人たちを病院へ搬送してくれないかってことをお願いしたら「分かりました」ってことで、なんとか良かったです。

それで帰り道、山手を通ると顔見知りの人たちが「ああ、おまえ大丈夫だったのか、ごはん食ったか」「まだ食ってねえ」「今、炊き出しでおにぎりやってるから、これ積んでいけ、米はあるか」「もう食料尽きた」「じゃあ待ってる、うちから米積んでくるから、持ってくるから」それで30キロ2袋分積んでいただいて、それで昼に着いた。私たちが自然の家に戻ると、県警のヘリが5人ほど急を要する人たちを乗っけて飛び立つとこでした。「ああ、よがった。よがった」

そして、翌日の4日目には湾の外に停泊した海上自衛隊の船から大型ヘリが救援物資を届けるようになったんです。アメリカ海軍のヘリコプターも5日目から來ました。私たちの戸倉って言う地域は、国道398号線で、その根元の部分の橋が全部やられて、道が寸断されたんで孤立化してたんですが、そのヘリの搬送でなんとか命を食いつなぐかたちになったんでした。ほんとに救援で、皆さんのおかげで私ら生き残ったんだなあって思います。

それから20日経って、行政の、実は住民台帳もなあんにもなくなった町の機能、それを回復するのはとてもできないから、近隣の市町村が皆さんのお世話をするんで、そっちに移動してくれないかって要請があったんで、二次避難したんです。二次避難先は加美町って言う仙台の北、古川市って言う町の西側の山に囲まれたきれいな町でした。電気は通っていて、灯りは点いている。水道も通っていて、毎日お風呂に入られる。そこで受けた暖かいもてなしは、地獄から天国に救われたような気持ちです。その町の人々とは、今も行き来し、来月(2月)の11日には南三陸町で獲れたタラを持って行って、そこでみんなでタラ鍋をしようっていう計画が持ち上がって、もうひとつの親戚が別の町に大勢できた感じています。

津波の直後、私たちは家がなくなり車がなくなり、全てのものが流されて、なあんにもなくなつたと思った。でもふっと我に返って考えてみると、いろんなものが残ってたんです。10日ほどしてテレビの、あるいは新聞の記者が入って報道するようになる。携帯電話がつながるようになる。そのとたん、がれきを乗り越えて古い友達とか知ってる人たちが尋ねてきた。両手にさまざまなもの

を下げてがれきを乗り越えてきた。顔見合わせて涙を流しながら「よかった、よかった、どうもありがとう」抱き合う。津波はそうした人間関係“絆”までは流せませんでした。きちっと残ってる。そして私たちの惨状が皆さんに伝えられると、今まで顔を見たこともないし、言葉を交わしたこともない、その人がいる事さえ知らなかった人たちから、さまざまな支援が届くようになりました。

ほんの1ヵ月して本屋の前に行くと、震災関連の本の“絆”“同じ時代を生きる”そうした文字がずらっと並んでました。「はあっ、津波震災はとっても悲惨なもので耐えようのないものだったけれど、津波が、震災が気付かせてくれたものもあつたんだなあ」って、そのとき思ったんです。なぜなら、私たちは3月11日以前、どんな中で、どんな暮らしをしてたでしょうか。今は空白の20年ってよく言われます。バブルがはじけて、経済が下降する。新興国が経済力つけてきて、安い品物で日本の輸出産業を圧迫して、大企業は生産拠点を東南アジアだったり中国だったりにみんな移してきました。そして、社員のクビ切りが始まります。残った社員も正規雇用、非正規雇用に分けられます。豊かな時代に生きてきた私たちは、個人の権利意識だけがすごく強くなっていました。それが個人情報保護法っていう法律、そういうもの含めて実はおんなじ時代に生きていながら、隣に暮らしていながら、その人間関係をブツブツブツと切る。若い人たちは、学校は出たけど職につけない。そういう凄まじい中で生きてきたのではないのでしょうか。その中にあって、絆なんて言葉はどっから生まれしてきたのか、ほんとうに信じられないような状況の中で、震災の1ヵ月後には、「人間はひとりでは生きていけない」「同じ時代を生きる」って言葉が溢れるようになっていたんです。震災が私たちに気付かせてくれた。震災の持つ別の面を見せていただきました。

一方、まだ解決の道が拓かれていない原子力発電所の事故がありまして、もう福島沿岸の人たちは、いつ故郷（ふるさと）に戻れるのか、故郷が故郷になり得るのかどうか、分からない中で避難生活を送ってます。「東京電力、政府、あれほど安全だって言ったんじゃないのか」「なんとかしろ！責任とれ！」そういう声が大きくあがってます。でも、ちょっと考えてみてください。どうして日本政府は、原子力エネルギーに頼るようになったのでしょうか。バブルの延長線上で私たちは、今日より明日、明日よりあさって。お金がとれて、楽しく、美味しいものが食べれるっていう、そういう願望を持って、これまで生きてこなかったのでしょうか。そういう願望を満たすためには、自動車であれ、電化製品であれ、優れたものを多く生産して、外国に売って、そのお金でもって豊かな生活を享受する、そういう中で生きてきた。ですから、そういう中で石油、化石エネルギーに最初は頼っていたんだけど、化石エネルギーをエネルギー源にすると炭酸ガスCO2が出て、それが地球の温暖化につながり、地球環境が破壊される。地球環境が破壊されると、私たちの生きていく未来が危ない。炭酸ガスを出さないエネルギー、自然エネルギーではなかなかまかないきれないので、それで原子力エネルギーというかたちになったように思います。そういう意味合いから言

うと、いちばん悪いのは確かに東京電力であり、政府の問題なんですが、そのように動かした根底に、実は私たち一人ひとりの欲望があったんじゃないかっていうふうに思います。

私たちは20mを超す大津波を受けました。それは想像をはるかに超えてるものでした。でも、震災後、いろんな過去の出来事、そしてさまざまなものが見えるようになりました。縄文遺跡がまず被災しなかった。縄文人はどこに住めばいいかをちゃんと知っていた。で、600年前にも同じような大きな津波があった。でも、結局人間は、車の発明やさまざまなことで楽な方へ楽な方へ暮らしを、住む場所を変えていった結果として、今回19,000人ですか、南三陸町では約1,000人の命が失われる結果となったんです。

学者は“想定外”というふうにこの震災を言います。想定外ってなんですか。そして、人間の知恵はそれほどまで素晴らしく、自然を超えるものなんですか。私は、NOというほかない。もう少し時代を経たら今度の津波以上の震災が起きないという保証は、どこにもございません。私たちは、自分の技術とか知識とか、そういうものにおごって、自然ときちんと対話する方法を忘れていたのではないだろうかと思います。そして私たちに「人間！ お前たちこのままでは滅ぶぞ！ 気づけっ！」と、バシンと怒鳴られた。そんなふうに、この震災を受けて私は感じています。

今の生命科学から言いますと、私たち生物の歴史は海から始まったと言われています。自然がいづれ創り出したものです。その創り出した母なる自然を超えて、私たちの存在があり得ないって言う事も分かってきています。今、震災直後10月でしたか70億に地球人口がなると発表がありました。70億の人が今、日本やヨーロッパで暮らしてる。そういう水準、レベルで生活したとき、その人間を支えるだけの地球環境というものはあるのでしょうか。たぶん、ないと思います。70億、ものすごい数です。私はこういう津波にもあいましたが、生きて生まれていることが、すごく幸せなことだと感じています。ですから、子供にも孫にも、それに続くものにも、この“生きる”ってことを是非してもらいたいものだと思っています。でも、この孫や私たちのあとに続くものたちに幸せを感じることができる社会と、仕組みと、自然を、私たちは残せるのだろうか。そういうふうに、実は津波に私は問われているような気がするんです。

およそ1,000人亡くなった南三陸の犠牲者にお線香つけて、あるいはお経をあげて、涙を流してそれを追悼するってことを毎月11日にやってきました。もうすぐ国主権の3月11日の慰霊祭も行われます。でも、その慰霊祭でほんとに犠牲者は浮かばれるのでしょうか。私たちは、生き残った私は、生き残ったものの気慰めにしかないだろうと感じています。もちろん、生きているものがきちんと生きるために、気慰めも必要なことは確かです。しかし、ほんとうに彼らに浮かばれるかたちをつくらんとするならば、私たちに続くものたちも「生きていて良かった、こういう世界を残してくれてありがとう」と言える、そういう町に復興すること、それ以外にないだろうと思っています。

今日は防災フェアってことで、皆さんお集まりいただきました。宮前区は高台にあります。津波の心配はほとんどないと…。あるとすれば東海沖地震がものすごい大きい規模で起きて、阪神で起きたような建物の倒壊とか、火事だとかそういうもので命を失うこと。ですからそういうことを起こさないために、今ここにいるものがどう生きていけば、どうすればいいかを勉強する会になればいいんだと思います。防災って言葉、実は私、疑問を持ってるんです。災害を防ぐ。ほんとに災害を防ぐことが私たちにできるんだろうか。

私は、災害は大きく2つに分けられると思っています。今度起きた、阪神で起きた、中越で起きた、そういうものがいわゆる自然災害です。この自然災害は、地震学者や気象学者などさまざまな学者が今後解明して、メカニズムが分かってくると思うんですが、それがきちんと分かったところで、その地震が起きないというようにすることは、私たちに不可能なんです。私たちにできるのは、そういう震災が起きたとき、そこに生きているものの命をできるだけ失わないようにすること、ただそれだけだと思っています。もう一方に人災というものがあって、戦争とか交通事故とか、このあいだイタリアで起きた船の事故というものはいわゆる人災で、人災は人間が原因となって起こす災害なんです。それは防げるかもしれませんが、でも、自然災害は防ぎようがありません。ただ、自然災害の中に見える人災の部分、自然を畏れないで逃げることをしなかった、甘くみてトップリーダーが避難指示を出さなかった、さまざまなことがございます。その人災の要素部分だけを消すことが、たぶん自然災害では重要なことだろうと思います。

10年ほど前から津波がくると予測されて自主防災組織が立ち上げられて、いろんな活動がスタートしたと私は言いましたが、実は津波が来てそれに対して逃げるといったことは頭にありましたが、そのときどんなものを持って逃げるのだとか、さまざまなこと言われていたことはどっかに吹っ飛んじゃいました。それで、とにかくかろうじて命が助かったという状況です。そういう大きなことが起きると、実は私たちの頭、パンクしちゃいます。忘れたんではない、そのことによって順番通りにいかない、自分の思考が停止する、そういうことがさまざま起きます。そのことを分かりながら、その災害にどう向かうかを、ここでも話し合っていていただくことが大切なのではないでしょうかと思います。

このぎっしり埋め尽くされた大都会の中で、震災をどう避けるか、はなはだ難しい課題が多くあるように思います。今、田舎は限界集落とかさまざまなことで悩んで、過疎化に拍車がかかっています。この都市は確かに便利でお金もとれて、さまざまな物理的な豊かさがございます。でも災害から逃れるとしたら、人間の分散を考えるよりほかに都市部の防災はないのかなあというのが正直な私の感想です。

今、志津川に行ってホテル観洋のロビーから晴れた日の海を見ますと、なにごともなかったような海が広がっている。一時全部消え去った養殖イカダが復活しています。そして、生き残った牡蠣

やホタテも今までの何十倍の速さで成長しています。海が若返ってリフレッシュして、生産性の高いものに戻っています。「自然てすごいなー」それにくらべて俺たち人間でなんなんだ。そんなことを、今は海を見るたび私は感じています。

ただ一方、皆さんのご支援にあるように、人間の力ってすごいなって感じたことも、おんなじ時代に生きる人の大切さってものをありがたく感じさせていただいたのも、この震災のおかげだと思っています。この震災がなかったら、ほんとに良かったか、それとも、あったが故に、私たちが新しい生き方と新しいつながり方ができて、22世紀につなぐ素晴らしい社会ができるのか。今その原点に私たちは立っているように感じています。

私は9月1日に、避難所から仮設に入居ができて、地元に戻りました。私が入った仮設は公有地にできた仮設に入れなかった抽選にもれた集落の人たちが、県に要請して集落の高台の私有地に建てた仮設住宅です。すごく不便です。でも、そこに入るといふ人は実はおんなじ集落の人たちなんです、全部。ですから3月11日以前のつきあいがずうっと連続してるわけなんです。「ごはん、間に合ってたか?」「きょう、こういうおかずもらったんだけど、お前食うか?」そういう、多分昭和30年代に近い暮らしが、三丁目の夕日みたいな、それに近い生活を私たちはしています。津波が来たもとの場所には、家を建てることはできません。高台にみんなで新しい家を建てなければなりません。ただ、60過ぎた人に金融機関がお金貸してくれるだろうか。そして全くゼロになってしまった一次産業。それでもって私たち収入を得て暮らしていけるのだろうか。さまざまな問題が横たわって、復興元年と言いながら、ほんとに一歩踏み出そうとしている状況ではありますが、復興とはほど遠いところに今私たちいます。私たちは皆さんのおかげで助かって、今なんとか暮らしていますが、このあともとの生活を取り戻し、そして未来につなぐ新しい集落を築くためには、踏ん張りどころかな、そしてそれが、生き残って生かされたもののつとめかなあっているふうに思いながら今も生きている次第です。

語り部ガイド、あんまり聞き慣れない言葉だと思います。でも、これは私たちに始まるものではございません。実は、広島・長崎の原爆の被害を語り継ごうっていう語り部ガイドがございます。彼らは人災に対して、同じ過ちを起こさないように語っています。私たちは震災、それから教えてもらったこと、それを震災の被害者にならなかった人にも共有をしていただいて、これから生きる道しるべを共につくっていきましょう。それにはまず震災がどうであったか、それから何が被災した人に見えてきたのか、そしていちばん大切な命を次の震災に備えるためにどう伝えるか。そういう意味合いで今活動しています。

東海・東南海そういう人々が今現地に足を運んで来てくれます。当初は観光みたいに惨めなど

ころは見せたくないとか、さまざまな抵抗もございましたが、何より現場に立つことが私は大切だと思ってます。私の話では伝えられないことが、たくさんございます。被災を受けた現地に立って、目で見て、耳で聞いて、手で触って、においを嗅いでみてください。私より雄弁に風景が、がれきが、皆さんに語ってくれるだろうと思います。そのことによって、細い絆が最初生まれたものが、太いおっきい絆になるような気がしてます。その絆を結び合うことによってのみ、私たちはこのあと生きていくことができるのだっていうふうに感じてます。

さまざまございました。語ればいくらでも語ることはございますが、私の話はこれぐらいにして、この中でも消防団の人たちなんかは南三陸の救援にかなり足を運んでいただいています。そして市役所とかそういう方たちが応援にたくさん現地に行ってみておられます。そういう中で、もし疑問とか質問とか、それから私たちに対しての励ましや、それからなにかございましたら、お聞きしたいと思いますので、どうぞこのあとそういう時間にしたいと思いますので、よろしくどうぞお願いいたします。きょうは雪が降る中、お運びいただきましてありがとうございます。

【質問】

本日は、たいへん貴重なお話を聞かせていただきましてありがとうございます。ぶしつけな質問で申し訳ないのですが、後藤さんは今健康状態は、ご自分の生活はどのようにされているのか、大変失礼ですがお歳をね、ちょっとお伺いしたくって、私も実はもう70になるんですが、町会の役員などもちょっとやっております…。これから先自分のことも心配というのもありまして、後藤さんもお見受けいたしますと私とあんまりかわんないかなと思ひまして、その辺ちょっとお聞かせ願えれば。よろしく。

自己紹介の方が足りなかったようなんですが、実は私自身は1947年、昭和22年、まあ団塊の世代の生まれなんです。それで今64歳です。南三陸町に生まれて育って、高校卒業してから銀行員してたんですが、その間に転勤で何カ所か歩いたぐらいで、あまり町の外には出てませんでした。そのあといろんな仕事したりして、60になったんで一応引退して…。南三陸町って地域は、平地が少なくって山から海へってことで、そういう地域だったものですから、海も山も農業もなんでもしないと生きていけない、いわゆる中山間地、山間地に近い海辺って言った方がいいのか、そういうところなんです。それで、畑も山もあって漁業協同組合の組合員で農協の組合員で森林組合でも組合員という、そういうかたちなんです。それで飯が食えるっていうことではないんですけど、そういうものをしながら、やっぱりあの、都市と田舎そういうものが単独である訳ではなくて、都市も田舎の助けが借りられないと多分生活が不都合だろうし、田舎も都市の人たちのさまざまな支えがないと生きていけない。そういうものを食べ物とかそういうもので、もし、つないでいけたらいいな

あってことで、観光の関係で地域ガイド養成ってことがございまして、その地域ガイド養成の講師やってくれということ、実は震災前そういう活動してまして、そこでボランティアの地域ガイドしてたんです。30名ほどの仲間でやってたんですが、震災受けてそのあと単純に観光ガイドではない、被災を語る活動をしてはどうかという提案が出されて、みんなを募集したところ、いちおう12名ほど手を挙げまして、今活動してる状況なんです。

そういう目的っていうか、やる事があるもので、私自身は、皆さんが舞台を見ると、なんだ、あんな腹のふくれた被災者がいるのか、私たちの方では震災太りって言ってるんですが、実は被災の今いちばんひどい状況っていうのは、職業、お金をとる仕事で大部分の人にはないんです。それで、皆さんの手厚い支援があるものですから、食べるものには不自由しない。その中で、まだ先が見えなくて悶々として酒飲んだり食ったりばかりしてる人が多いんで、この私のような震災太りができるっていう現状になってるんです。仮設住宅がどういうところかって言うと、プレハブの会社によって多少つくりは違うんですが、4畳半2間に廊下、玄関があって、流しがあって、ガステーブルがあって、トイレがあって、風呂があるっていうつくりなんです、それが2人以上4人までの世帯はそこに入るっていうかたちになってるんですが、そういうところで暮らしてるんです。まあ、寒冷地なんでそれまでの寒さしのぎでは足りないってことで、暖房とかさまざまなものが整備されて、なんとかこの寒い冬ですが、暮らしている状況です。

ただ、高齢者がすごく多いこと、そして主産業であった漁業の人たちのいちばんの生産手段である漁船が、9割方流出してなくなってます。そして海で養殖していた、その諸々全部持ってかれまして、今、当面入ってくるお金も義援金とかそういうものしかない。そういう中で、実は今暮らしている状況なんです。それで、まあ3年に伸びましたが、その期間のうちに自分の家を建てるか、アパートを借りるかして、自立しなさいと言われてます。ただ、お金が、収入の道がない中でですね、家を自分で建てた人には200万、政府がお金よこすって言ってますけども、家なんて建てられないんですよ。それと建てる場所ももとい家じゃなく、別のところにみんなで相談して、建てなくちゃならないってこともあるんで、先が全く見えない状況なんです。まあ田舎なんで一家たとえば漁業してると、ワカメの時期になると男達が海に行って、わかめを刈り取ってきて浜で茹であげて、それを塩蔵して脱水して塩を抜いて、皆さん食べられるような塩蔵ワカメにするとかいろんな作業があって、家族全部、病気の人以外は仕事があるんです。おばあちゃんでもワカメの芯抜き作業があったり、孫の子守りであったり、それからすぐ脇にある小さな農地で、いろんな食べる野菜を作ったりというそういう仕事があつたんです。それが今は仮設に行くと、何もないんですやる事が。そういう中で、自分の居場所とかそういうものが失われている状況なものですから、ルーズになったり、男は酒に弱くてアルコールの摂取量が多くて、石巻では肝硬変で亡くなった一人暮らしの老

人がいるという状況が生まれてるんですね。

そして、仮設への入居の仕方なんですけど、まあ神戸方式と言いますか、みんなを平等に扱うということから、くじで入れちゃったんです。くじで入れたために、今までのコミュニティが全くない状況で、隣の人になんて人で、何してた人か、全く分からない人が隣同士になるような中で仮設暮らしっていうのが営まれているんです。そういうものがあるんですね。中越では神戸の時のようになると孤独死とかさまざまなことが起きるんでということで、集落ごとに同じ仮設に移ったんで、そのあと戻る時もすごくスムーズだったんですが、今、高台移転の相談しようと思っても、同じ集落に住んでたあの人やどこに居て、この人がどこに居てっていう、そういう調査からはじめて、それをつなぎ直すところからやらなきゃならないという状況なんです。ただ、政府は早くやれ早くやれって言って、3月までになんぼ予算が必要だか政府に上げてこい、上げてこないなら予算やめにするぞって話になって、とんでもない状況が今起きてるってことが現状なんです。だからそういう問題も含めてですね、ぜひ皆さん、時間と交通費がございましたらお運びをいただきたいなあと考えてます。まあ、やることをその中で見つけた人は私のようになんとか元気にあちこち走りまわってます。ただ、やることを見つけられなかった人が、今、すごく不安な状態にあります。そういう人たちに、皆さんからのお声がけで何かをしてくれればいいのかと思います。物質的なものはむしろこれ以上は多くは与えない方がいいような気がしてます。ラクを人間しちゃうとラクにおぼれてそれ以上の力、出なくなります。ですからそうではなくて、やる気を起こすような、そういうものを今、支援をいただければなあと考えてます。もちろん政府にお願いするんであれば、家一軒ひとりひとりにつくってくれよなんて大きなことを、もののおねだりをするんですけど、皆さんに対しては、そういうことで、今、被災した人が困ってるんだということを伝えたいと思います。すいません長くなりました。

【回答へのお礼】

ありがとうございました。これからもお体に気をつけてご活躍いただければと思います。ほんとうにありがとうございました。

ありがとうございました。

拍手